
みかん

麻婆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みかん

【Nコード】

N3347T

【作者名】

麻婆

【あらすじ】

実家やお婆ちゃんの家。いつ買ってきているのか、気が付けばコタツに載っている蜜柑。そんな経験ありませんか？

冬の日。

二人の高校生が蜜柑を食べます。

そして、蜜柑によって二人の関係は少し変わります。

いつの間にかコタツに載っている蜜柑のような、そんな日常的一幕。

「蜜柑を贅沢に食べる方法を知っているか？」
昔、僕がまだ小学生のころだった。うちの父さんがそう言ったのを今でも憶えている。

高校一年生の冬。

窓の内と外。その気温差で曇った窓ガラスを、ついいい、と指でなでる。その少し濡れにじむ隙間から、白い結晶のかたまりが次々に流れていくのが見える。

僕の住む青森では、北海道ほどではないにしろ辟易するくらい雪がつもる。雪かきが日課となり、小さな川や側溝はすぐに捨てられた雪で山になる。「川が山になる」口にして見ると可笑しな感じがした。

僕はそんな寒くて凍える屋外ではなく、暖かくて眠気をさそう昼休みの教室にいる。暖房器具が真横にあるもんだから余計にぼんやりしてしまう。みんなは昼食をとり終えて、それぞれグループになつてざわざわと騒がしい。

僕はひとり、窓際の最後尾で蜜柑を食べている。食後のデザートと言ったところか。しかし食べていると言つのは、一般的には語弊があるようだ。

「なあ、越後屋。蜜柑を贅沢に食べる方法を知っているか？」
僕の前の座席で、同じく独りして紙パックの抹茶ミルクをすすっている越後屋に問いかけてみた。

「なんだそれ？ 知らねーよ、そんなもん。つーか学校に蜜柑持つてくるな。爺くせえ」

越後屋は口が悪い。見かけは非常に綺麗な女子のだが、性格が粗暴きわまりない。クラスのほぼ全員に恐れられている。今日も眉間にシワを寄せて、不機嫌そうに前髪をずっといじくっている。

「その前髪、似合わないと思う」

そんな越後屋にこんなことを言ってしまう僕も、ある意味で恐れられている。

「うるせえよ！」

案の定、真つ赤な顔で怒鳴られてしまったから、僕は蜜柑の続きに取りかかる。抹茶ミルクが顔に飛んできたことは不問とする。

まず、蜜柑の皮をむき、実を取り出すところまでは普通と変わらない。僕の場合、実を指で押すのだ。実には半透明の薄皮が付いている。その薄皮の向こうで蜜柑のツブが潰れていくのが感じられる。そうすると、汁が溜まり、薄皮がだんだんとふくれていく。ここで焦ってはいけない。強く押し過ぎると汁があふれ出す。素人に良くあるミスだ。僕ぐらいの熟練者になると、そんな愚かな真似はしない。たつぷりと蜜柑の汁が溜まったのを確認すると、薄皮の一部を噛み、汁を飲むのだ。残された薄皮と汁を取られた実は、大胆に捨てる。ここでもつたいない、とか思って躊躇するのは蜜柑に失礼というものだ。

「お前、その食べ方おかしいだろ」

「だが美味しそう……だろ？」

「そんなわけあるか。やけに男前な声出すんじゃないよ。気持ちわるい……」

越後屋はそんなことを言うが、大きな瞳は興味深そうに蜜柑を見つめている。

「それが贅沢な蜜柑の食べ方なんか？」

「そうだね。最初のうちは失敗する確率が高いけれど……やって見る？」

「やらねー。爺くせえのがうつる」

越後屋は興味ないフリをしてそっぽを向いた。僕に背中を向けて

再び抹茶ミルクをすすり始める。視線は窓の外。降り続ける雪を眺めている。不機嫌そうに細められた目は、下校時の大変さを表しているようであった。

授業が全て滞りなく終わった。HRも掃除も終わった。季節が違えば、もう教室の中には誰も居なかっただろう。しかし、今は冬。列車が遅れているという情報が入り、列車組みの数名が居残っている。僕と越後屋もその中に含まれている。「これだから冬は……」「冬に観光しにければこの苦勞を……」などと毒づきながら一箇所に固まっている数名。もちろん越後屋はそれに加わることはなく、僕も暗黙の了解であるかのように外され、二人してぼうつと外を眺めている。ひとり者は外を眺めるのが通例である。

「止む気配がねーな……」

越後屋が独り言のようにつぶやく。周りには僕しかいないので、僕に言ったのかも知れないと思い、「そうだね」と同意する。

「みんな、冬は大変だって言うだろ？」

眉根をよせて越後屋は僕を見た。

「言うね。実際、大変じゃないか」

「まあ……大変だ。でもよ、雪の結晶って見たことあるだろ？ 理科の実習とかでさ」

僕は小学生のころに見た雪の結晶を思い出す。

「見たね。それが？」

「あれってさ、大きいもんだと肉眼でもはっきり分かるだろ？ あの独特の形がさ」

「うん」

「素敵だよな」

越後屋は激しく不機嫌な顔で、窓の外を見ながらそんなことを言っただ。

「その台詞、似合わないと思う」

「う、う、うるせーぞ……蜜柑せーじん」

蜜柑を馬鹿にするのは許せない、と思ったが、馬鹿にされているのは僕だと気付き、溜飲が下がった。

外は降雪量を増し、風と相まって吹雪に転じた。街も、人も、そして窓から見える全ての景色が真っ白に変わる。窓のすみに溜まっている雪をジッと眺めて見る。雪の結晶を見ようと思ったのだけど、窓越しでは曇っていていまいち良く分からない。だから僕は窓を開けようとした。

「おい。お前なにする気だ……！」

窓のカギに手をかけた僕へ、越後屋は物理層に干渉できそうなほど強烈な視線を飛ばしてくる。

「え？ 素敵を見ようと思って……」

「……………」越後屋は顔を赤くして目をふせると、「それは忘れる。それと、窓開けたら寒いだろがボケ」と僕の手を払う。

ペチリ、と控えめな音がした。

「痛いじゃないか……」

「うるせー」とつぶやき、越後屋はマフラーに顔を埋める。瞳は相変わらず不機嫌そうに細められていた。

「越後屋は……うるせー！ が口癖なんだね」

「うる……！」

バカヤロウ、と僕の足を踏む越後屋。ダシン、と重たい音が響いた。周りにいた数名がギョツとしている。

「おおおう……ぐ」

僕は思わずうなり声を上げ、足を押さえる。

「ふん……」

越後屋はまた顔を赤くして怒っていた。

僕の足から痛みが去ったところ、教室に担任の先生が入ってきた。

「電車は運休になった。親御さんに迎えに来てもらえ。無理な奴は先生達が送って行くから、職員室まで来い。分かったなー」

うへえ、と皆からうめき声上がる。

僕は早速、今日は休みだと思われる父さんに連絡した。父さんは面倒そうだったが、結局来てくれることになった。

「越後屋は迎え頼まないの？」

黙って外を眺める越後屋は、一向に電話をする素振りを見せない。「うちは共働きだ。仕事終わるまで待つ」

僕の問いかけに、律儀に返答する越後屋。マフラーに顔を埋めて、机に突っ伏している。

「先生に送ってもらえば？」

越後屋はおつくうそうな動作で、職員室に向かおうとしている数名を親指で示す。

「なるほど、混ざりたくないわけね……」

ここで発動する僕と越後屋の状況。家がわりと近いのである。登下校中に見かけることもあったので憶えている。冬はまだ始まったばかりだ。こんな状況は頻繁に訪れるだろう。

「うちの車に乗ってく？」

一応たずねてみた。どうせ、蜜柑臭くなる、とか言って断るのだろう。

「……………」

マジか……。どうやら本気で悩んでいるようだった。意外だった。「……………」行く

考えた末、越後屋はぶっきらぼうにそう答えた。その際、何故だかすごい睨まれた。

父さんの運転する車は、吹雪だか地吹雪だか分からないくらい真

っ白な道を、のろのろと走っている。冬の運転は、とにかくスピードを出さないことだと父さんは言っていた。

僕と越後屋は後部座席に隣り合って座っている。僕が助手席側だ。なぜか助手席には母さんも鎮座していて、うちの家族が集合してしまった。越後屋は僕の両親に挨拶とお礼を述べると、後はずっと窓を眺めている。父さんと母さんは、僕と越後屋の関係が気になるように、ずっとにやにやしていた。

手持ちぶさたになった僕は、蜜柑を取り出して皮をむき始める。

越後屋はそれを見とがめると、「また食べん……なの?」と、無理していつもとは違う言葉づかいで、呆れた顔をして見つめてくる。

「越後屋もやってみなよ」

僕は例の蜜柑の贅沢な食べ方を越後屋に伝授する。越後屋は僕の両親の手前か、黙ってそれを聞いている。じつは興味があったのでは、と僕は推測している。

戸惑っていた越後屋だが、結局、蜜柑の実をその細い指で押すことになった。黙って実をふにふにさせている越後屋の瞳は、なんだかとても楽しそうである。

「ほほう……うまいね」

「嬉しくない」

越後屋は不名誉だ、と瞳で語った。

「噛んで見て。犬歯で噛むのがコツだよ」

「うん……」

ある程度ふくらんだ実を、越後屋は素直な返事で口に入れ、少しもごもごした後に噛んだ。

「んむ……んん?」

いま、越後屋の口の中には、甘酸っぱい蜜柑の汁が広がっていることだろう。

僕のように捨てず、越後屋はそのまま実を咀嚼して飲み込んだ。

「どじっ?」

「くふふ……ふふ……」

越後屋はじつに嬉しそうな顔で笑うのだった。

「お前がその食べ方を教えるなんて珍しいな」と父さんも笑う。

「そうだったけ？ …………… あ、越後屋は笑顔の方が似合ってると思う」

僕の素直な感想に、目を見開いて驚く越後屋。

「う……………う……………」

うるせー、と言おうとしているが、両親の手前か、どうも言葉にならないらしい。

なんだか恥ずかしくなってきたので、窓に視線をやって誤魔化そうとすると、

「うん……………」

と越後屋はうなずいた。顔はマフラーに埋まってよく見えなかったが、耳まで赤くして怒っている。……………たぶん。

訳もなく蜜柑の味が、口いっぱいに広がった気がした。

僕は気まずくなって、窓に視線を移した。雪の結晶が目に入る。それを見て僕は、

「確かに素敵だ……………」とつぶやいた。

それを聞きとがめた越後屋が、両親に気付かれないよう、こっそりと僕の足を蹴ってきた。その時に触れたふくらはぎ。越後屋の体温と感触が、すごく暖かくて柔らかくて、僕はまた思わず素直に伝えてしまいそうになった。そんなことをしたら越後屋もまた怒るだろう。真っ赤な顔をして。

でも、わざと言ってみるのもいいかも知れない。

まあ、とりあえず……………その前に。

僕は熱くなった顔を窓ガラスに押し付け、赤面がバレませんように……………と、そう願った。

「くふふ……………」

助手席に座る母さんの忍び笑いが聞こえ、母さんにはバレバレだと気付いた冬の出来事。

みかん
了

(後書き)

最後まで読んで下さった皆様へ。
感謝、感謝です。

宜しければ、またお越し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3347t/>

みかん

2011年5月26日20時10分発行